鉄道高架下帯状空間の動的活用による新旧市街の縫合

都市デザイン研究室　cy14015　嶋津崇靖
主査　前田英寿　/　副査　谷口大造

＊詳細街区全体立面

研究背景・目的

地方都市中心市街地の衰退されて久しいが賑わっているものもあれば、衰退しているものもある。違いはどこにあるのだろうか。本研究では中心市街地の空間構成に着目して、解決策を探る。

研究対象は私の故郷の静岡県浜松市。そして同県において同規模で浜松市同様に城下町である静岡市を比較対象とした。

基本データ

	浜松市	静岡市
総人口	801,646	701,803
世帯	314,644	290,052
人口密度	511	497
面積	1558.06	1441.90
GDP	3 兆 1,355 億	2 兆 9,536 億
観光交流客数	1750 万人	2769 万人
空き家率	13.9%→18.5%	13.6%→14.3%
(2011～2016)	(+4.6%)	(+0.7%)

＜考察＞

総人口～GDP では大きな差が見られない。

→浜松の静岡同様の賑わいが創出できるポテンシャルの存在

観光交流客数と空き家率の差→静岡が浜松よりも賑わっていることの裏付け

空間構造

＜静岡市＞

都市機能が 1km 圏内に集約した回遊性のあるコンパクトな街。

鉄道駅から城址に向かって新旧市街地が並んでいる。

呉服商店街という明確な軸がある。

駿府城址公園などの、城下町の歴史が垣間見える。

＊静岡市中心市街地

＜浜松市＞

都市機能が分散し、新旧市街地が東西に分断されている。

新旧市街地間には緑地や溜まり場が存在せず、ものづくりや音楽といった浜松らしさを象徴する施設はほとんどない。

＊浜松市中心市街地

計画敷地

＊計画敷地周辺図

＊新川高架下遊歩道兼駐輪場

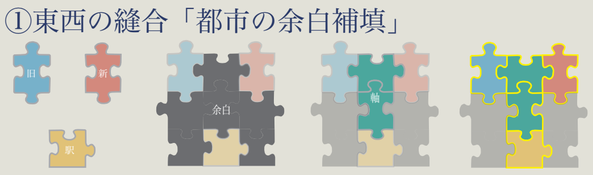
＊新川高架下駐車場

＊新川開渠部

＊第一通り駅北側側面

計画方針：「4 つの縫合」

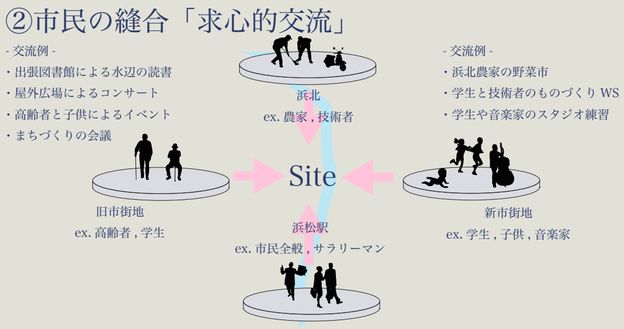
①東西の縫合「都市の余白補填」



都市の余白、新旧市街地中間地点に人の集まる軸を設けて、街のつながりを生み出す。

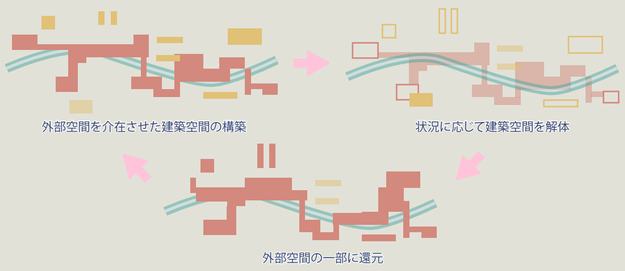
縦軸を跨ぐ横動線をグリッドを基に配置することで明快な回遊性を実現する。

②市民の縫合「求心的交流」



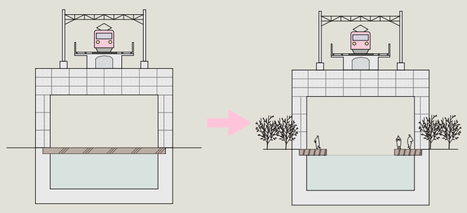
ものづくりや音楽を体験・発信する空間や公共空間など、各地域の老若男女が交流できる街のオープンスペースをつくる。

③時限的縫合「時限的建築空間」



外部空間を介在させて建築空間を配置することで空間的に開くと同時に、仮設で建築空間を構成し、状況に応じた構築と解体を繰り返すことで時限的にも開く。

④水辺の縫合「水辺空間創出」



市街地における水辺空間創出のため、現在は暗渠である新川を街に開き、街の環境向上を図る。

平面図

再生した新川との関わりが生まれるよう地上階は外部空間をメインに。上階では川と垂直な動線を積極的に確保することで、計画敷地一帯が都市を見つめ直す装置となる。

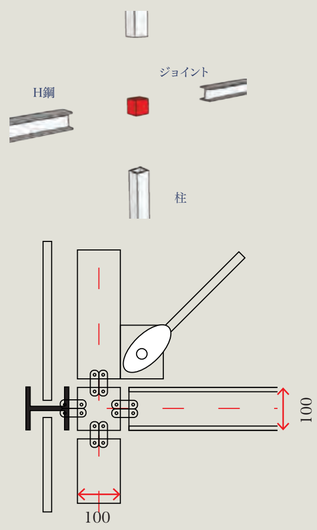
＊詳細街区 1F 平面図　Scale:1/350

＊詳細街区 2F 平面図　Scale:1/350

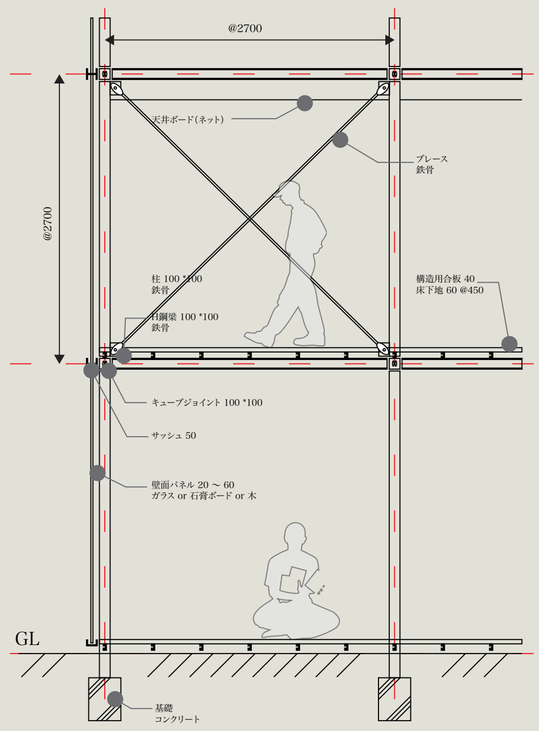
＊詳細街区 3F 平面図　Scale:1/350

モデュール組立式

足場をヒントにした、モデュール組立式の鉄骨造を提案する。高架下の寸法を考慮して、2.7m を基準にモデュールを展開する。対象計画敷地周辺の道路は狭いため、柱材と梁材を現場に持ち込み、ジョイント部材で組み立てる現場組立方式を採用する。



ジョイント部分　Scale：1/10



矩計図　Scale：1/40

模型写真 / パース

＊容易な構造の構築と解体

＊新川に沿った連なる建築

＊広場での世代を超えた市民交流

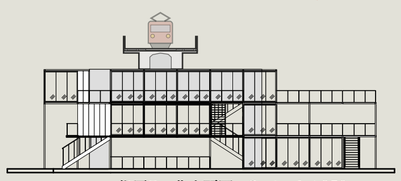
＊定期的に開催されるイベント広場での音楽演奏

＊川を跨ぐ横動線が都市を新たな視点から見る機会を与える。

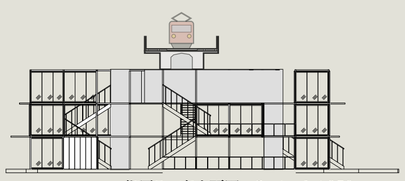
＊内部空間の書庫と周囲のオープンスペース

立面図

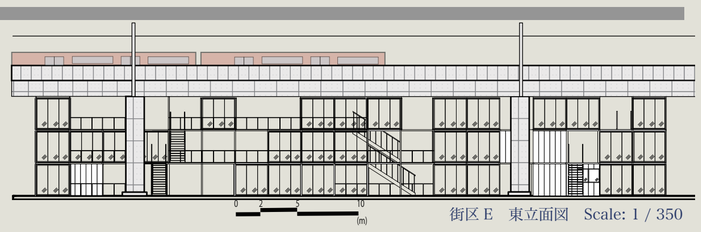
構造体を主体とすることで高架下の視線が抜ける。街の境界を強調するのではなく、にじませる。



街区E　北立面図　Scale: 1 / 350



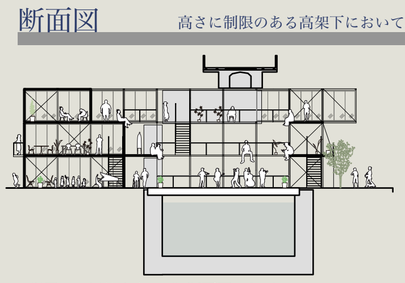
街区E　南立面図　Scale: 1 / 350



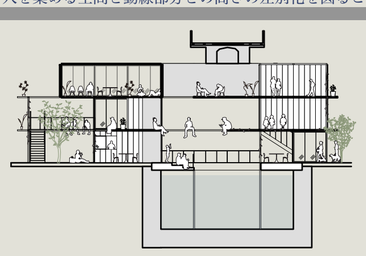
街区 E　東立面図　Scale: 1 / 350

断面図

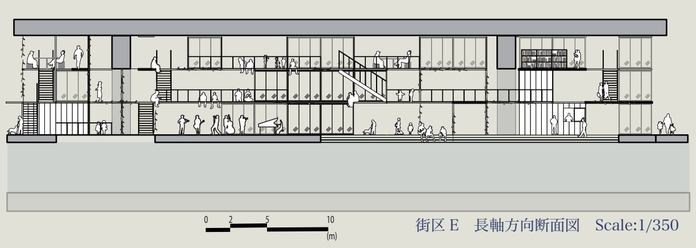
高さに制限のある高架下において、人を集める空間と動線部分との高さの差別化を図ることで、高架でも高さを感じられる。



街区 E　短軸方向 BB” 断面図　Scale: 1 / 350



街区 E　短軸方向 AA” 断面図　Scale: 1 / 350



街区 E　長軸方向断面図　Scale:1/350